生涯教育シリーズ XVIII

認　知　症

1. 認知症の特集にあたって

北海道大学大学院医学研究科精神医学分野教授
北海道医師会常任理事
小　山　　司

この度、北海道医報生涯教育シリーズXVⅢとして「認知症」を特集することになった。合計10のテーマについて、2008年2月号から順次掲載の予定である。テーマと執筆者所属については下に示すとおりである。

最近（2007年11月21日）発表された総務省の推計人口（概算値）によると、国内の総人口に占める75歳以上の高齢者の割合が10.0%に達したとのことである。比較可能な統計を取り始めた1950年における75歳以上人口は1.3%、91年には5.0%に上昇。その後は高齢化が加速し、わずか16年間で10.0%になった。人口実数では2007年11月1日の総人口は1億2,779万人。このうち75歳以上は1,270万人で、男性は男性人口の7.7%にあたる479万人、女性は女性人口の12.2%の797万人となっている。

ちなみに65歳以上は2,753万人に上り、総人口の21.5%を占めた。出所は定かでないが、従来、65歳以上の人口が7%を超えると高齢化社会、14%を超えると高齢社会、21%を超えると超高齢社会と定義されてきた。今回の総務省統計局の発表は、わが国におけるまさに超高齢社会の到来を告げるものであった。

20数年前に65歳以上の高齢者が全人口の7%を超え、高齢化社会を迎えたわが国では、有吉佐和子の小説「恍惚の人」が社会的なセンセーションを引き起こしたことは記憶に新しい。それを契機に高齢者の認知症が一般の人々の間で大きな関心事となった。しかし、当時はまだAlzheimer病という疾患名を知る人はごく限られていたが、その後、加速度的に高齢化がすすんできたわが国ではAlzheimerという名前はもはや普通名詞化し、人口に膾炙するまでになっている。

上述した動向を背景に近年、認知症研究は著しく進展し、多くの新知見が明らかにされ、診断ツールの開発と進歩が臨床に浸透し、Alzheimer治療薬が発売されるようになった。また、2000年4月から介護保険制度や成年後見制度が導入され、高齢者のケアマネージメントの取り組みや高齢者の人権にも目配りがされるようになり、認知症の問題はますます重要となっている。超高齢社会の到来にあたって今後さらに重要な問題となるであろう。本企画が「認知症」の全体像を鳥瞰するうえで会員諸兄に多少ともお役に立てれば幸いである。

北海道医報生涯教育シリーズXVⅢ　「認知症」
（医報　本号から順次掲載）

項　目		執筆者所属		医報掲載予定
1	認知症の特集にあたって	小山　　司	北大医学研究科精神医学	H20 1月 1日
2	認知症の診断と疫学(物忘れ外来を含む)	中野　倫仁	北海道医療大学心理科学部臨床心理学科	2月 1日
3	認知症の画像診断	蔭山　博司	函館新都市病院脳神経内科	3月 1日
4	認知症の神経心理	大槻　美佳	北海道医療大学心理科学部言語聴覚療法学科	4月 1日
5	アルツハイマー型認知症、MCIの臨床	内海久美子	砂川市立病院精神神経科	5月 1日
6	非アルツハイマー型認知症の臨床	布村　明彦	旭川医科大学精神医学	6月 1日
7	認知症とうつ	中川　　伸	北大医学研究科精神医学	7月 1日
8	認知症の薬物療法	下濱　　俊	札幌医科大学神経内科	8月 1日
9	認知症のリハビリテーション	池田　　望	札幌医科大学保健医療学部作業療法学科（臨床作業療法学講座）	9月 1日
10	認知症・うつと介護保険制度	山本　長史	北海道保健福祉局介護保険課	10月 1日
11	認知症と後見人制度	舘石　宗徳	札幌市保健福祉局健康衛生部	11月 1日